

# 広島大学病院

Hiroshima University Hospital Medical-Dental Liaison News

No.21  
2011. 3

## ニュース

東北地方太平洋沖地震をはじめとする、  
東日本大震災で被災されたみなさまに  
心よりお見舞い申し上げます。



# たんぽぽ保育園が新しくなりました。



「たんぽぽ保育園」は、安定した保育を提供することで医師・看護師等が診療等に従事しやすい環境を提供することを目指し、平成21年10月から大学直営となりました。また、平成22年4月から365日開園を行っております。

このたび、職員の就業環境のさらなる向上を目指し、園児の定員を60人から72人への増員を行うため、新保育園舎を建設しました。

## たんぽぽ保育園看板掲げ式

2010年11月17日、新しく建設された管理棟1階の保育園舎玄関で「たんぽぽ保育園」の看板掲げ式が行われました。



(左)西田副病院長 (右)越智光夫病院長

たんぽぽ保育園の看板は、越智光夫病院長が揮毫(きごう)されました。



園内の長い廊下は、楽しいひとときが過ごせそうです。

「たんぽぽ保育園」の壁画は、本学教育学部第四類 生涯活動教育系造形芸術系コース2年生 出本沙也佳(いでもと・さやか)さん、白谷詩央里(しらたに・しおり)さんのお二人がデザインしてくださいました。



保育園の各クラス名となっている動物をモチーフに壁画のデザインくださったお二人には、病院長より感謝状が贈られました。

左から、教育学研究科内田雅三教授、出本沙也佳さん、白谷詩央里さん、越智光夫病院長

その後、お二人はデザインして下さったたんぽぽ保育園へ足を運ばれ、保育園児から、お歌と手作りのシュシュがそれぞれに贈られました。



園児からプレゼントされたシュシュ

# 任期満了につき 病院長が交代します。



## 越智病院長にインタビューしました。

「誰でも病気にはなる。その病気を治療する病院を日常的な空間に近付けたい。」をモットーに2007年4月～2011年3月までの4年間、精力的な改革を行い、更に研究分野でも尽力された。

### 代表的な改革

1. 新しい医療構築のため安定した経営基盤の確立 (100床当たりの月間診療収入は国立大学病院第1位)
2. 梁山泊(レジデントハウス)の建設 (優れた医療人の育成)
3. 患者アメニティーへの配慮 (全人的医療の実践)



**Q** 4年間の在任中、一貫して大切にされてきた理念は何でしょうか。

**A** 未来の医療構築です。大学病院には教育、研究、診療を通しての未来の医療を構築する使命があります。その使命を遂行するには、削減され続ける運営費交付金だけでは限界があり、高価な機器の購入や高度な技術を提供することができないため、病院として安定した経営が必要となります。利益を運用し職員数を増やし職員の働き甲斐のある環境づくりを目指してきました。



**Q** 病院長に就任して3年目の平成21年度、100床当たりの月間診療収入が東大病院を抜き、国立大学病院で第1位と高収入となりましたが、この数字は未来への医療構築への一歩でしょうか。

**A** 100床当たりの収入以外にも、職員数も1位です。医師をはじめ職員の負担を軽減し、専門職としてそれぞれが従事できるよう人員の配置には万全を期して、働き甲斐のある職場にすることが重要です。収入だけが前面に出ていますが、この数字により職員の処遇改善が患者サービスの向上へとつながり、働き甲斐のある職場提供が可能となります。



**Q** 患者サービスへの取り組みですが、入院棟南広場にいこいの森を整備、世界的に有名なオペラ歌手を招いて院内でロビーコンサート、更にオリンピックで活躍された選手を招いた特別講演を実施しようと考えられた理由を教えてください。

**A** 「病院を日常的な空間に近付けたい。」からです。例えば、気候のいいときには緑の多いところを散歩したいと誰でも思うでしょう。そんなとき、病院でもそれができるように「いこいの森」を整備しました。ロビーコンサートも同様です。患者アメニティーを模索していたとき、友人である中丸三千繪さんが「私の声で患者さんを勇気づけられるなら。」とおっしゃってください、病院でのオペラコンサートが毎年実現しました。



北京オリンピック選手の特別講演会についても同様で、オリンピックでメダルを獲得する背景にある苦勞と、その苦勞を克服した時の喜びや感動を患者さんに伝えることができればと平成21年に浜口京子選手、平成22年には吉田沙保里選手を病院へ招き講演会を開催しました。患者さんには大変喜んでいただきました。





**Q** レジデントハウスが完成しこの4月から入居が始まりますが、この施設に期待すること、役割についてお聞かせください。

**A** 現在は円滑な人間関係を築くコミュニケーションを取ることが、難しくなっているのではないのでしょうか。『研修医同士が「同じ釜で飯を食った仲間」という親密な関係が築け、その関係が未来へ続くような関係となる。その関係が自然と作れる場所、研修医同士が気軽に集える場所、そして広島大学の一員であって広島県の医療に貢献したい、と思えるようになる。』そんな場所として役立って欲しいと願っています。



**Q** 現在、新診療棟が建設中ですがどのような病院になることを期待されていますか？

**A** 働き甲斐のある職場ですね。それも身の丈に合った建物で、中四国では最高の医療が提供できる機関、そして未来へ向けての医療が実現できるよう期待しています。



**Q** 病院長を退任されますが、今後は理事（医療担当）としてどういった角度から広島大学病院を盛り立てて行きたいとお考えでしょうか。

**A** 経営については、今後も理事（医療担当）として次期の病院長である茶山教授を側面から盛り立てていき、一医師、整形外科教授としては、トランスレーショナルリサーチ、専門である膝の分野で未来への医療を探求し、患者さんに福音をもたらすことができればと考えております。



インタビューー：病院広報担当

## ありがとうございました。退任のご挨拶



看護部長  
才野原 照子

### 退任に際してのごあいさつ

平成16年4月、国立大学の法人化により、広島大学病院は新たな体制で動き出しました。不安と希望に満ちたスタートだったように思います。あれから7年、社会の変化にあわせて、また医療の充実をめざして、数々の取り組みがなされました。結果として、経営的には、国立大学病院としてはトップクラスの成果をあげることになりました。平成20年度には7対1看護師配置が導入され、看護職員は、平成16年4月の497名（内男性18名）から、平成22年4月には765名（内男性50名）となりました。外来にも専従の看護師が配置でき、看護は一段と充実しました。スペシャリストも誕生しチーム活動が充実しつつあります。“地域の人々に信頼される病院”そしてまた“職員がいきいきとしている病院”をめざすことを掲げてここまできて、今その通りになりつつあることを感じます。このような時期に構成員の一員であったことを誇りに思い、また勤務させていただいたことに深く感謝申し上げるとともに、病院の今後のますますの発展を祈念申し上げます。

## 退任のご挨拶



診療支援部長  
**玖島 利男**

### 初代診療支援部 部長として

「診療支援部」と言っても、みなさまには聞きなれない組織名ではないかと思います。病院にはさまざまな部門がありますが、医師でも看護師でもない多種・多様な医療技術者・職能集団「診療支援部」が大学病院という高度先進医療の一翼を担っています。

診療支援部には、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、視能訓練士、臨床工学技士、歯科衛生士、歯科技工士という職種が集まっており、中にはお聞きになったことのある職名もあると思います。

「診療支援部」設立の目的は、文字通り、病院の診療支援を担う医療スタッフ、それぞれの専門的な縦軸組織のみではなく、横軸に統合結集し、病院運営・診療を支える組織として、診療の質と効率をより高めることと、患者のみなさまと医師の診療・検査のサポート力を高めること、また、それらを通じて病院経営・運営の改革を推進することです。

病院を訪れる患者のみなさまやそのご家族、来院される方々には、この機会に是非、「診療支援部」をお見知りおきいただければと思います。「病院や医療スタッフの常識は、世間の非常識」と揶揄され、それを裏付けるみなさまから戴いた投書の数々…命をお預かりする私たちこそ、こうした声に真摯でなければなりません。

私たち診療支援部スタッフにとって、みなさま方からお声をかけていただく事は、「病院改革への動機付け」になりますし、「医療従事者として、何よりの励み」でございます。今後とも診療支援部をどうぞ、よろしくお願い申し上げます。

## 広島大学病院職員が受賞

ORS(orthopedic Research Society、アメリカ整形外科基礎学会)で優れた研究者に贈られるNew Investigator Recognition Award (NIRA)を広島大学病院亀井直輔(かめい・なおすけ)助教と中佐智幸(なかさ・ともゆき)助教が受賞しました。



受賞式での亀井直輔助教(左から3番目)と中佐智幸助教(左から2番目)

NIRAには683名のエントリーがあり、最終審査に残った44名が審査され、10名が受賞しました。米国をはじめ海外の施設の研究者が8名、日本の研究機関からはわずか2名の受賞でした。日本からの2名が本院職員でした。

受賞論文は次のとおりです。



広島大学病院再生医療部助教  
**亀井 直輔**  
 KAMEI, Naosuke

演題 Endothelial progenitor cells promote regeneration of injured spinal cord through Notch signaling

要約 骨髄や血液中には血管の元になる血管内皮前駆細胞が存在し、この細胞を使った下肢虚血治療はすでに臨床研究で成果を挙げています。今回の研究では、脊髄損傷モデルに血管内皮前駆細胞を投与すると、血管新生とともに、損傷された神経の再構築が促進されることが判明し、その機序として、血管内皮前駆細胞と神経との間のシグナル伝達の関与を証明しました。今後は血液中の血管内皮前駆細胞を使った脊髄再生治療の開発が期待されます。



広島大学病院整形外科助教  
**中佐 智幸**  
 NAKASA, Tomoyuki

演題 The inhibitory effect of microRNA-146 expression on joint destruction in rheumatoid arthritis

要約 microRNA-146は、関節リウマチの滑膜組織、末梢血に強く発現していることが既に明らかとなっていたが、このたびの研究により、microRNA-146により破骨細胞分化が抑制されることが判明した。それと同時に、合成microRNA-146の投与により、関節炎マウスの関節破壊がある程度抑制されることも明らかとなり、新たな関節リウマチの治療につながる事が期待されます。

2011年4月  
梁山泊入居開始  
(レジデントハウス)

広島大学病院で  
臨床研修を受けられる医師の  
入居がはじまります。



広島大学病院<sup>りょうざんぼく</sup>梁山泊、2011年4月より入居開始  
(レジデントハウス)

広島大学病院構内に梁山泊が完成し、3月14日(月)に竣工式を行いました。

全国的な医師不足の中、広島県下唯一の医育機関として、医師定着にも資する目的で、2009年梁山泊の建設に至りました。



新外来棟  
進捗状況



2010年11月



2011年3月

<http://www.hiroshima-u.ac.jp/hosp/>

広島大学病院のホームページ

わかりやすく見やすいページづくりを心がけていこうと思いますので、引き続きご愛顧のほど、よろしくお願いします。

ご意見やご感想を下記へお願いします。

広島大学病院 秘書室広報担当 〒734-8551 広島市南区霞一丁目2番3号 Tel 082-257-5014 Fax 082-257-5074



地球環境にやさしい印刷方法で  
作成されています。  
ESPA (環境保護印刷推進協議会)  
シルバリーリーフ賞